

会報

第 3 2 号

平成29年(2017) 1月15日

編集・発行
書学書道史学会
会報委員会〒166-8531
東京都杉並区和田3-30-22
大学生協学会支援センター内
TEL : (03) 5307-1175

FAX : (03) 5307-1196

メールアドレス :
shogaku@univcoop.or.jp

第27回 書学書道史学会大会を終えて

中村 史朗



10月1日、2日の二日間にわたり滋賀大学教育学部キャンパスにおいて、第27回書学書道史学会大会が開催されました。通常より早い時期の開催で、また会場校への交通事情がよくないなか、約九十名の方にご参加いただきました。開催校として厚く御礼申し上げます。

研究発表では、初日に徳泉さち氏、正岡知晃氏、二日目に成田健太郎氏、宮崎洋一氏、菅野智明氏、福田哲之氏、澤田雅弘氏の計七名の方が日頃の成果を発表されました。中国書道史関係のものを中心に、若手から学会役員の方にいるまで、多様な顔ぶれによるもので、従来の研究の到達にさまざまな投げかけをされました。以後の学会活動に大きな刺激となったことと思います。

また今大会は、一日目にパネルディスカッション、二日目に講演会と、両日に性格の異なる企画を設定しました。パネルディスカッションは「書学・書道史学と美術館・博物館の連携を考える」と題して、書学書道史研究と密接な関わりを有しながら、学会で

はあまり関心が払われることのない博物館・美術館の運営実態について理解を深め、その機能や社会的な役割を知るとともに、学会の研究活動、あるいは公教育における鑑賞教育との連携のあり方などを探ろうとする試みです。笠嶋忠幸氏にはコーディネーターとして当初段階から企画の内容を組み立てていただき、萱のり子氏にも折にふれご意見をいただきながら実施当日にいたしました。各博物館・美術館から尾川明穂氏、川畑薫氏、星子桃子氏、六人部克典氏の四名の若手学芸担当者に登壇いただき、各館運営の実情と自身の業務内容や研究・教育との連携のあり方などについてご発言いただきました。会員個々の研究基盤を考える上でも有意義な時間であったと考えます。意見交換の時間が十分でなかったものの、いくつかの課題も浮き彫りになり、今後に同種の企画が再度設定されてもよいのではないかと考えました。

さらに名誉会員の杉村邦彦氏による「明治初期の巖谷一六とその書法―新出の『巖谷一六日記』を基として―」と題した講演が行われました。杉村氏は滋賀県のご出身で、周知のとおり近代日中書法交流史に関する研究を精力的に進めておられます。水口藩士であった巖谷一六の出身地は会場校と比較的接近しており、開催地に縁の深い内容で講演を実施することができました。現状では、巖谷一六が書道史研究の対象として取り上げられることは少なく、新出の『巖谷一六日記』から得られた情報を中心に、書人一六研究の基本を提示されました。合わせて、一教室を会場として「巖谷一六とその周辺」と題する資料展示を行いました。杉村氏の蔵品を主とし、甲賀市・市史編纂室長の米田実氏にもご協力いただき、三十数点の真跡と関連書籍などを展観しました。巖谷一六作品を中心に、日下部鳴鶴、松田雪柯ら親交のあった能書や何如璋、楊守敬ら清人の名家の書跡をあわせ出陳しました。一般に知られる「一六体」とは趣を異にする作品も含め、その書風の意外な多様性を確認する貴重な機会となりました。

地方の小規模大学のため専門分野の学生がわずかで、卒業生や他専攻の学生の応援を得て何とかスタッフを確保し大会にのぞみました。盛りだくさんの大会となり、運営上消化しきれない面があったとは思いますが、何とか日程を乗りきることができ充実感を覚えております。開催に当たりまして、澤田雅弘理事長、高城弘一事務局長、前開催校担当の橋本貴朗氏はじめ多くの先生方にお力添えいただきました。また、開催両日は幹事の先生方にも格別のご協力をいただきました。無事大会を終えられましたこと、皆様にあらためて御礼申し上げます。

(会場校責任者)

要旨「書学・書道史学と美術館・博物館の連携を考える」

コーディネーター…笠嶋 忠幸

第27回書学書道史学会大会では、開催校である滋賀大学教育学部の中村史朗先生と国内局との協議、検討によってパネルディスカッション「書学・書道史学と美術館・博物館の連携を考える」を準備し、開催いたしました。司会を中村先生、コーディネーターおよび進行役を国内局長・笠嶋忠幸（出光美術館が担当し、また国内局副局長・萱のり子先生からもご助言いただきましたながら、具体化しました。

当日は、冒頭に笠嶋がPPTスライドを用いて、本企画の主旨説明ならびに基調報告を行い、その下でリレー形式にて四名の若手研究者および学芸員にご登壇いただきました。これまでも当学会では、美術館・博物館での見学会をおこなってきた実績があります。しかし美術館・博物館の特殊な職務状況をご理解いただく場はありませんでした。そこで、今回は美術館・博物館とはどのような社会的任務を負っている職場なのかをご説明した上で、専門職員としての学芸員という職務内容について、一通りご説明するところからはじめさせていただきます。一口に「博物館」といっても多種多彩であること。博物館の社会的使命、ないし専門業務は「展示・公開」「調査・研究」「収集・保管」「教育・普及」という明確な四つの柱から成り立っていること。また大学や研究所とは一線を画し、「社会教育施設」としての役割が基本であること、などを確認・共有した上で、個々の報告に移りました。



パネラーには、六人部克典氏（東京国立博物館、前任は台東区立書道博物館）、尾川明穂氏（五島美術館、前任は安田女子大学）、星子桃子氏（名古屋市立博物館、前任は教職）、川畑薫氏（八幡市立松花堂庭園・美術館、庭園と美術館の運営として）の四名に、それぞれ異なる立場と視点からお話しいただきました。内容は、各博物館・美術館の設置概要と使命や特徴から、コレクションの内容と代表作品の紹介、展覧会（企画、常設）開催状況と展示公開

の考え方、保存管理の意識と修復事業、そして特別観覧の位置づけ等、説明いただき、さらに各館にて「学芸員」のどのような活躍が期待されているかについても、実務経験者としての視点で具体的にお話しいただきました。

美術館・博物館も例外なく、近年は世代交代が激化しつつあります。そうした時期は、新たな学芸員を迎えるまたとないチャンスである一方で、そのタイミングだから起こりうる様々な課題も多いものです。特に書道を専門とする学芸員の採用は、全国枠の中で見た場合、極めて特殊事情であることがパネラーの話の中にもありました。美術館業界では絵画・工芸の担当が主流をなしていることもあつて、書道分野以外の作品に対する理解は大いに求められます。歴史系博物館においては、「書」「書道」として私たちが扱っているものは「文書・典籍」の中に含まれるため、美術・芸術としての観点ではなく、文学・歴史学としての常識が求められます。大型館である国立博物館等にいたつては、仔細な組織分掌が前提にあつて、一般の方々が理想としている「学芸員」像とは随分とかけ離れた職務となつていきます。このようにそれぞれが異なる環境の中で課題をもっており、多彩な職務をこなしていることは、一見大いなる「やりがい」にもつながっているのですが、いわゆる外部から見た職務イメージとは、随分とかけ離れたものである実感について、一部、赤裸々な発言もありました。

報告後の質疑応答では、LED照明の取り扱いに関する質問がなされたほか、澤田理事長からは「高校教育以降、日常における書と関わりが低下」してしまう傾向への懸念が示され、今後は美術館・博物館での普及活動とともに、現場でも実技指導ばかりでなく書の魅力を語れる人を育ててゆく必要があるとのご指摘があったことを特記しておきます。今回の企画は報告が主となつてしまったために、残念ながらディスカッションというところまでには至りませんでした。それでも出席された皆様より、「今まで見てなかった点がよく理解できた」との声を複数お寄せいただきました。書学・書道史学という同じ専門性を通じて日々交流している仲間であつても、立場や内容は様々ではありません。また理想と現実との差は、どの職場にもあります。今後も互いに職場内容への理解を深めつつ、「協力できること」について双方からアイデアを積極的に出し合つて、当学会ならではの「書学連携」の実現をめざしてゆきましょう。同様の企画を期待するご要望もいただきましたので、来年度に向けて国内局で準備してまいります。

杉村邦彦氏講演「明治初期の巖谷一六とその書法―新出の『巖谷一六日記』を基にして―」



平成26年、巖谷一六（一八三四～一九〇五）の故郷である滋賀県甲賀市の水口歴史民俗資料館は、青山廣志（元毎日新聞記者、一六研究者）の御遺族より一六の日記、漢詩文稿、書簡他の寄贈を受け、講演者の杉村邦彦氏は日記と漢詩文稿の釈読を依頼された。日記の内容は、天皇詔勅等の起草や行幸供奉といった公務から、詩文の会や臨書会等の交遊記録、家庭での出来事や個人的な記録ほか多岐に亘っており、一六の人と為りを知る好資料である。

●一六の公務

日記には詔勅の起草、位記、官記の作成記録等の公務についての記述が頻出するが、恣意的な記録であるため、公文書との照合が必要であろう。また、明治天皇行幸供奉の記録も多く、明治5年9月12日の鉄道開幕式の際には、一六も貴顕高官達とともに、新橋―横浜間を陪席していた。

●一六の書画鑑賞と書作品揮毫

明治政府の高官であった一六は、日本や中国の法書や名画を鑑賞するに最も恵まれた地位にあった。日記によると、正倉院の名香「蘭香」、螺鈿の琵琶、宇多天皇「周易抄」、藤原佐理の消息、小野道風の古歌巻、光明皇后「臨樂毅論」ほか橘逸勢、嵯峨天皇、空海の遺墨も目にしている。

日記には書の鑑賞のみならず、書の揮毫についての記述も極めて多い。一例として明治10年7月22日、一六が京都行幸中の天皇に供奉した際、奠墓のために休暇を請い水口へ帰郷した。その時、徳永、田川氏からの需めに応じて屏風二双、檜扇、扁額等、一度に三十点を揮毫しているが、その書体は楷書、行書を中心としたもので、狂草の類は見られなかったという。

●一六と中国人の交遊

日記に見られる中国人との交遊は何如璋、馮畔三、衛鏞等の名に留まる。何如璋は清国駐日公使、馮畔三は上海の筆工で、一六に筆墨硯紙を納めていた。衛鏞は民間の書家、篆刻家で、一六とは詩酒をともにしている。

日記は楊守敬が来日する明治13年直前で終わっているため、その交遊を伺うことができないのは残念である。

●明治初期における一六の書法

日記には北碑に触れることがないことから、北碑に開眼するのは楊守敬の来日待たねばならないと推測される。したがって明治初期における一六の書風形成は以下の三点に集約される。

1. 明治天皇の詔勅起草と揮毫。
2. 碑碣を書丹する機会の増加と、それに適した書風の揮毫。
3. 顔真卿書法の受容と換骨奪胎

王羲之や初唐三大

家ははじめとする晋唐書法はもとより、日本の書蹟をも広く学んだ一六は、特に顔真卿の書に力を注ぎ、顔真卿の書法の特徴である円筆を方筆化することで、独自の書風を築いていたのではないかと推測する。

大会当日は関連する書画資料が展示されましたので、リストを掲載いたします。



【近代日中書法交流史関係遺墨資料】

―巖谷一六とその交友を中心として―

1. 巖谷一六（一八三四～一九〇五） 李白詩（杉村氏春林葩屋蔵品より）
2. 巖谷一六 東照公遺訓
3. 巖谷一六 梅花図
4. 巖谷一六 開戦之大詔（日露戦争）
5. 楊守敬（一八三九～一九一五）撰書 蒙將軍之象碑拓本
6. 楊守敬 臨裴鏡民碑並孟法師碑
7. 楊守敬 王維詩竹里館
8. 楊守敬 水経注
9. 黎庶昌（一八三七～一八九八） 七言絶句
10. 何如璋（一八三八～一八九一） 蘇軾「李思訓画長江絶島図」
11. 岡千仞（一八三三～一九一四） 三保浦囑目
12. 張斯桂（一八一六～？） 咏大坂花園平將軍手植え高臘梅
13. 松田雪柯（一八三三～一八八二） 菊花図
14. 三島中洲（一八三二～一九一九） 七言絶句
15. 日下部鳴鶴（一八三八～一九二二） 集漢鏡銘字
16. 矢土錦山（一八四九～一九二〇） 詠史
17. 矢土錦山 来翰集（巖谷一六、楊守敬等）
18. 羅振玉（一八六六～一九四〇） 臨甲骨文 金城（一八七八～一九二六） 花鳥図合璧立軸
19. 羅振玉 臨西狹狹
20. 内藤湖南（一八六六～一九三四） 丙寅歲除七律
21. 狩野君山（一八六八～一九四七） 杜甫詩二首
22. 長尾雨山（一八六四～一九四二） 菊花図

※杉村邦彦氏による本講演の概要は『書学書道史研究』に掲載予定です。どうぞ御期待下さい。

平成27年度 会計決算報告書		
	項 目	決 算 額
収入部	個人会員会費	2,544,000
	団体賛助会費	600,000
	大会参加費	388,000
	大会懇親会費	268,500
	その他の収入	38,360
	本年度収入計	3,838,860
	前年度繰越金	8,587,587
	収入合計	12,426,447
支出部	編集局経費	649,404
	「学会展望」準備費	105,000
	国際局経費	0
	国内局経費	0
	大会運営費	200,000
	大会準備費	100,000
	大会懇親会費	300,000
	学術局経費	0
	研究局経費	0
	会報編集委経費	0
	ホームページ委経費	78,300
	事務局経費	
	会議費	3,217
	荷造送料	440,575
	遠隔地役員交通費	30,880
	選管費	32,240
	名簿発行費	179,948
	通信費	2,532
	事務消耗品備品費	1,276
	事務委託費	692,280
	人件費	100,000
	諸学会費	2,000
	予備費	
	本年度支出計	2,917,652
	次年度繰越金	9,508,795
	合計	12,426,447

平成28年度 会計予算報告書		
	項 目	予 算 額
収入部	個人会員会費	2,800,000
	団体賛助会費	550,000
	大会参加費	350,000
	大会懇親会費	160,000
	その他の収入	30,000
	本年度収入計	3,890,000
	前年度繰越金	9,508,795
	収入合計	13,398,795
支出部	編集局経費	700,000
	「学会展望」準備費	100,000
	国際局経費	300,000
	国内局経費	300,000
	大会運営費	200,000
	大会準備費	100,000
	大会懇親会費	160,000
	学術局経費	100,000
	研究局経費	900,000
	会報編集委経費	30,000
	ホームページ委経費	300,000
	事務局経費	
	会議費	30,000
	荷造送料	500,000
	遠隔地役員交通費	400,000
	選管費	0
	名簿発行費	0
	通信費	8,000
	事務消耗品備品費	10,000
	事務委託費	700,000
	人件費	100,000
	諸学会費	2,000
	予備費	8,458,795
	本年度支出計	13,398,795
	次年度繰越金	0
	合計	13,398,795

- ▽平成27年度決算・事業活動報告案
 (高城弘一事務局長)
 ▽平成27年度決算案監査報告(杉浦妙子監事)
 ▽平成28年度予算・事業活動案
 (高城弘一事務局長)
 (報告)
 ▽編集局報告(中村伸夫編集局長)
 ▽学術局報告(矢野千載副学術局長)
 ▽国際局報告(富田淳国際局長)
 ▽国内局報告(笠嶋忠幸国内局長)
 ▽研究局報告(河内利治研究局長)
 ▽会報委員会報告(小川博章会報委員長)
 (連絡)
 ▽大会日程等説明(中村史朗会場校責任者)
 ▽事務連絡(高城弘一事務局長)

本年度の第27回大会は、平成28年10月1日・2日の両日、滋賀大学教育学部キャンパス・大講義室において開催された。初日冒頭、例年通り本年度総会が開催された。総会は、小川博章会報委員長の司会で、笠嶋忠幸国内局長の開会の辞ではじまった。滋賀大学・位田隆一学長による開催校代表挨拶、澤田雅弘理事長の挨拶に続き、大野修作副国際局長を議長に選出して議事に入り、以下の議事及び報告がなされた。なお、議事については、いずれも満場一致で可決された。

各局活動報告

国内局

本年度の大会は、平成28年10月1日(土)、2日(日)の両日、滋賀大学において開催されました。担当校の中村史朗先生ほか皆様のご協力により、自然豊かな近江石山の地に充実した内容となりました。この場を借りまして、心より感謝を申し上げます。

本大会では全7件の意欲的な研究発表のほか、初日にはパネルディスカッションを企画し、本学会の将来に向け、いかに美術館・博物館との連携を図るかを考える試みでしたが、実際には、その前に美術館・博物館の現在の活動内容や課題について皆さんにご理解いただく場となったようです。二日目は杉村邦彦先生(名誉会員)に、巖谷一六に関するご講演をいただき、また関係資料の特別展示にもお力添えいただきました。詳細は、別稿の大会報告をご覧ください。

来年度は日本大学(東京・桜上水)を会場として開催する予定です。ただし日程については会場校と未だ調整中につき、追ってご連絡します。

(国内局長 笠嶋忠幸)

国際局

本年度も、中国大陆・台湾・韓国・アメリカにおける書画・典籍・金石資料に関する特別展・常設展について、各施設がウェブ上で提供する情報にすぐアクセスできる展覧会案内をホームページ上に掲載しました。また、外国から講演等で来日する方があれば、広報等をはじめとするご支援をさせていただきたく存じますので、お知らせください。今後とも、海外での最新の動向をお伝えすべく、各種の情報を発信したいと思えます。

(国際局長 富田 淳)

学術局

J-STAGEについて

学会誌『書学書道史研究』のJ-STAGE(ジェイ・ステージ)掲載については、これまで局幹事の献身的な尽力で行ってきました。しかし、学会の安定した会計状況と掲載の永年継続という責務に鑑み、他学会と同様に外部委託することが理事会で承認され、昨秋の総会で報告いたしました。

早速、社歴や実績、本学会誌特有の難字対応などを総合的に勘案して26号の掲載を依頼しましたが、常に局がかかわり、誤りなきよう進めてまいります。東京の会社に依頼したのも、そのためですが、従来どおり来春公開できるように努めます。なお公開時には、学会ホームページでお知らせいたします。

東洋学・アジア研究連絡協議会

学会ホームページで既報のとおり、本学会が加盟する右記協議会の2016年度総会が、12月17日(土)に東京大学法文二号館で開催され、シンポジウム「東洋学・アジア研究の新たな振興をめざしてPARTⅣ」も開催されました。

日本学術会議第一部(人文・社会科学)主催シンポジウム

人文・社会科学系学部・大学院の「組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」を国立大学法人に求めた2016年6月の文科省からの通知に対し、日本学術会議が同年7月に続き、昨年8月10日にシンポジウムを実施しました。いずれも学会のホームページでお知らせしたとおりです。

データベース「学会名鑑」

日本学術会議・日本学術協力財団・科学技術振興機構連携の標記データベースについて、昨年11月、実態調査に回答いたしました。今後も随時更新してまいります。

<https://gakkai.jst.go.jp/gakkai/>

(学術局長 森岡 隆)

研究局

「研究促進助成金制度」は、会員各位の研究課題の計画書を募集し、応募のあった研究計画から優れた成果または有用な成果が期待できる計画を選定したうえで、研究促進助成金を支給し、翌々年に成果の提出を義務づけ、書学書道史の研究促進と振興に寄与していただくものです。

しかし平成28年度の「研究促進助成金制度」応募研究計画書は0件でした。そこで常任理事会、理事会の議を経て、平成29年度の「研究促進助成金制度」は、多くの会員各位が応募しやすいように「研究促進助成金規程」の一部を改正し、「助成金は消耗品、備品・物品(書籍を含む)購入および旅費・宿泊費に充てることとし、領収書(物品旅券・宿泊代等)および行程表の提出を求める。ことになりました。詳細は、「研究促進助成金制度／平成29年度募集要項」「平成29年度書学書道史学会研究促進助成金制度」「応募研究計画書」がホームページに掲載されていますので、まず一読下さい。

■研究期間：平成29年度～平成30年度

(平成29年9月1日～平成31年8月31日の二年間)

■研究促進助成金：二件につき30万円(三件まで採択)

■申請受付期間：平成29年6月1日(木)～6月7日(水)

■申請方法：ホームページ掲載「平成29年度書学書道史学会「研究促進助成金制度」応募研究計画書」Word形式をダウンロードし、受付期間内に下記問い合わせ先までEメール(添付ファイルで申請して下さい)。

■問い合わせ先：shogaku@univcoop.or.jp

■問い合わせ方法：Eメールのみ(平成29年度研究助成問い合わせ「と」記入下さい。)

問い合わせ先：shogaku@univcoop.or.jp

問い合わせ先：shogaku@univcoop.or.jp

問い合わせ先：shogaku@univcoop.or.jp

問い合わせ先：shogaku@univcoop.or.jp

(研究局長 河内利治)

編集 集 局

学会誌『書学書道史研究』第26号は、最終段階での校正作業に予想以上の時間を要したため、刊行がおくれ、会員諸氏への送付も例年よりおそくなりました。論文四編、研究ノート一篇、國學院大學で開催された第26回大会での特別講演の記録、中国書道史関連の研究動向、書評二件、という構成です。

第27号への投稿論文の提出締め切りは、平成29年3月31日ですので厳守願います。滋賀大学で開催された第27回大会での研究発表者はもちろんのこと、ひろく会員諸氏からの投稿をお待ちしています。論文の投稿規定等については書学書道史学会のホームページをご覧ください。投稿規定についても厳守願います。編集局の事業につき、ご質問やご意見、あるいはご要望がある場合は、編集局担当者（中村伸夫、菅野智明、高橋利郎）までお願い致します。（編集局長 中村伸夫）

事務局

『平成27年度事業・活動報告』

4月19日 第13期第2回常任理事会（於 大東会館）
5月15日 第29号『会報』発行及び発送
6月30日 第26回大会発表申込締切
7月12日 第13期第3回常任理事会（於 大東会館）
第58回（臨時）理事会（於 大東会館）
8月30日 『大会最終案内』『大会レジュメ集』発行及び発送
9月15日 平成26年度決算会計監査
10月3日 第59回定例理事会（於 國學院大學）
第26回大会1日目（於 國學院大學）
10月4日 第26回大会2日目（於 國學院大學）
11月初旬 第25号『書学書道史研究』発行及び発送
12月31日 第26号『書学書道史研究』投稿申請申込締切
1月15日 第30号『会報』発行及び発送
2月18日 第14期役員選挙投票締切
2月21日 第14期役員選挙開票（於 大東会館）

3月4日 選挙選出理事による緊急会議（於 大東会館）
3月13日 第59回（臨時）理事会（於 大東会館）
3月31日 第26号『書学書道史研究』投稿原稿締切

『平成28年度事業・活動計画』

5月15日 第31号『会報』発行及び発送
6月30日 第27回大会発表申込締切
7月10日 第14期第1回常任理事会（於 大東会館）
8月30日 『大会最終案内』『大会レジュメ集』発行及び発送
8月中旬 平成27年度決算会計監査
10月1日 第60回定例理事会（於 滋賀大学）
第27回大会1日目（於 滋賀大学）
10月2日 第27回大会2日目（於 滋賀大学）
11月初旬 第26号『書学書道史研究』発行及び発送
12月31日 第27号『書学書道史研究』投稿申請申込締切
1月15日 第32号『会報』発行及び発送
3月31日 第27号『書学書道史研究』投稿原稿締切

『平成29年度・第28回書学書道史学会大会会場（予定）のお知らせ』

毎年、書学書道史学会大会は、西日本、東日本と会場を交互に移して、実施してきました。平成28年度は、滋賀大学（西日本）での開催により、平成29年度は、東日本において開催します。理事会等の推薦もあり、鈴木晴彦理事の本務校である日本大学を会場校として、11月下旬を開催日として予定しています。ご承知おき下さいますようお願いいたします。

『学生会員から一般会員への手続について』

本学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。この制度は、学生会員（学生会費適用の方）が大学院を修了、もしくは満期退学・自主退学、その他の理由により学籍を失った（学割証の発給対象でなくなった）時点で、学生会員資格を、一旦終了とするものです。該当の方が

引き続き本学会会員に留まろうとする場合、以下の会員変更手続が必要となります。会員変更手続きの用紙が学会ホームページにアップしてあります。ホームページの「入会申込書」を選択し、「会員変更申込書」をダウンロードして、必要事項を記入の上、学会事務局へ送付して下さい。また、当該会員手続きは、届け出制度となつてゐるため、理事会での資格審査はありません。したがって、書類提出のみで学生会員資格の終了時点から自動的に一般会員資格が付与されます。今春に学生会員資格を失う方は、早めに手続をお願いします。送付先は左記のとおりです。

〈事務局の連絡先〉

〒166-8532

東京都杉並区和田3-30-22

大学生協学会支援センター内

書学書道史学会事務局

TEL:03(3307)1175

FAX:03(3307)1196

メールアドレス: shogaku@univ.coop.or.jp

※電話での応答は「大学生協学会支援センター」となります。

（事務局長 高城弘一）

新入会員紹介 事務局

（一般会員）

柴田大輝 みずほ第一フィナンシャルテクノロジー株式会社

オレグ・プレシアーニ 大東文化大学

押上万希子 藤女子大学

（学生会員）

前川知里 大東文化大学大学院生

澤田乃理子 佛教大学大学院生

井田明宏 筑波大学大学院生

陳 奕君 筑波大学大学院生

※平成28年4月〜同年9月に申請された方

平成28年度研究費本関係者採択一覽

事務局

本会会員の採択課題に限ったが、会員が分担研究者で、代表者が非会員である場合には、※を付して代表者を末尾に付記した。複数の会員が関わる同課題については、当該課題のもとに代表者と分担研究者とを併記した。なお、所属の後の数字は、平成28年度のみ補助金の配分額。計画額には※を付した。

- 基礎研究(A) 継続(平成26) 作品誌の観点による大徳寺伝来五百羅漢図の総合的研究 板倉聖哲(東京大学)※代表 井手誠之輔(九州大学)420千円
- 基礎研究(A) 新規 日本における「生き物供養」何でも供養の連環的研究 基盤の構築 永田徳夫(群馬大学)※代表 相田満(国文学研究資料館)980千円
- 基礎研究(B) 継続(平成25) 懷徳堂の総合的研究 岸田知子(中央大学)※代表 竹田健二(島根大学)150千円
- 基礎研究(B) 継続(平成25) 前近代中国における交通路と閩津の環境史学的研究 福原啓郎(京都外国語大学)180千円
- 基礎研究(B) 継続(平成26) 多面的把握に基づく新義真言宗系聖教の解明と公開促進を果たす研究 赤尾栄慶(京都国立博物館)※代表 宇都宮啓吾(大阪大谷大学)430千円
- 基礎研究(B) 継続(平成26) 宮廷と美術に関する比較美術史学的研究 板倉聖哲(東京大学)※代表 秋山聰(東京大学)400千円
- 基礎研究(B) 継続(平成26) 概念表現と実体化表現から見た中国語文法史の展開―構文と文法範疇の相関的変遷の解明 大西克也(東京大学)3130千円
- 基礎研究(B) 継続(平成26) Multidisciplinary Approachによる戦国秦漢期新出土資料研究 大西克也(東京大学)※代表 谷中信一(日本女子大学)3770千円
- 基礎研究(B) 継続(平成26) 学校における美術鑑賞の授業モデルの拡充と普及についての実践的研究 萱のり子(東京学芸大学)※代表 松岡宏明(関西国際大学)350千円
- 基礎研究(B) 継続(平成26) 学力困難地域における学校・家庭・地域を通じた総合的な学力向上推進方策に関する研究 村山昌央(北海道教育大学)※代表 玉井康之(北海道教育大学)230千円
- 基礎研究(B) 継続(平成27) 海外敦煌書儀・六朝尺牘文獻の古代日本の受容実態の解明 小林比出代(信州大学)※代表 西一夫(信州大学)430千円
- 基礎研究(B) 継続(平成27) 脳生理学的知見を取り入れた芸術教育における感性育成プログラムの開発 小林比出代(信州大学)※代表 齊藤忠彦(信州大学)290千円
- 基礎研究(B) 継続(平成27) 年号勘文資料の研究 基盤の構築 近藤浩之(北海道大学)※代表 水上雅晴(中央大学)25千円
- 基礎研究(B) 継続(平成27) 清朝末期における中国踏査写真資料に関する発展的研究 富田淳(東京国立博物館)※代表 関紀子(東京国立博物館)180千円
- 基礎研究(B) 継続(平成27) 南北朝・隋代における造像銘の調査及び史料集成とその総合的研究 宮崎洋一(広島文教女子大学)※代表 佐藤智水(龍谷大学)3900千円
- 基礎研究(B) 新規 東アジア美術における仏伝の表象 板倉聖哲(東京大学)※代表 福本泰生(京都大学)200千円
- 基礎研究(B) 新規 隋唐仏教社会の多元的構造の解明と東アジア文化論の構築 氣賀澤保規(明治大学)150千円
- 基礎研究(B) 新規 運動の「まちなさ」を要因とする書字困難児に対する早期支援プログラムの開発 齋木久美(茨城大学)※代表 勝一博亮(茨城大学)520千円
- 基礎研究(B) 新規 中国道教における聖地と巡礼に関する総合的調査と研究 土屋昌明(専修大学)850千円
- 基礎研究(C) 継続(平成23) 本阿弥光悦筆和歌巻の特徴解明と伝光悦筆和歌巻の真贋鑑定法の確立 森岡隆(筑波大学)0千円*
- 基礎研究(C) 継続(平成25) 鎌書再発見のメカニズム―中国中世期の石刻資料を端緒として― 東賢司(愛媛大学)910千円
- 基礎研究(C) 継続(平成26) 北朝末隋代墓誌中に混在する自律的刻法の楷書新表現に関する基礎的研究 澤田雅弘(大東文化大学)1300千円
- 基礎研究(C) 継続(平成27) 書の芸術性に関する術語と現代学者の解釈との比較研究 河内利治(大東文化大学)100千円
- 基礎研究(C) 継続(平成27) 学習者の実態調査に基づく左利き者に有用な書写教材及び授業開発に関する基礎的研究 小林比出代(信州大学)1500千円
- 基礎研究(C) 継続(平成27) 漢字文化圏における骨トと龜トに関する総合的研究 近藤浩之(北海道大学)180千円
- 基礎研究(C) 継続(平成27) 『和漢朗詠集』諸本の集成と研究 山本まり子(茶の水女子大学)200千円
- 基礎研究(C) 新規 日中韓における書教育に関わる教員養成モデルの構築―現状の比較・分析を通して― 加藤泰弘(東京学芸大学)20千円
- 基礎研究(C) 新規 植民地期朝鮮の職業書芸家における「書」認識に関する研究 金貴粉(大阪経済法科大学)200千円
- 基礎研究(C) 新規 読み書き指導に関する幼・小連携カリキュラムの開発 齋木久美(茨城大学)160千円
- 基礎研究(C) 新規 日本語表記に使われる文字の由来、特質等を理解させるための視聴覚教材の開発 I 和田圭社(福岡教育大学)※研究分担者 鈴木慶子(長崎大学) 山元宣宏(宮崎大学)0千円
- 基礎研究(C) 新規 日本の「書くこと」の教育改善のための調査研究―ドイツの入門期文字言語獲得の知略― 鈴木慶子(長崎大学)200千円
- 基礎研究(C) 新規 『三國志演義』二十四巻系後期諸本の研究 中川論(大東文化大学)100千円
- 基礎研究(C) 新規 日本近代書道史再考 美術・教育制度、言語施策の構築を視野に入れて― 中村史朗(滋賀大学)600千円
- 基礎研究(C) 新規 中国中世石刻資料から見る水運と埋葬の連鎖 東賢司(愛媛大学)500千円
- 基礎研究(C) 新規 「教育推進のための小学校国語教科書写における毛筆動画教材及び授業開発 樋口咲子(千葉大学)170千円
- 基礎研究(C) 新規 筆順変遷過程の資料化を図るための基礎的研究 松本仁志(広島大学)910千円
- 挑戦的萌芽研究 継続(平成26) 日本流入の中国書画に関する新旧収蔵家ネットワークの復元的研究 菅野智明(筑波大学)100千円 分担 増田知之(安田女子大学)
- 挑戦的萌芽研究 継続(平成26) 唐宋時代の巡れと移動をめぐる社会史的研究 氣賀澤保規(明治大学)50千円
- 挑戦的萌芽研究 平成27) 行為と形骸の間―近代の書における「臨書」の諸相をめぐる考察 萱のり子(大阪教育大学)910千円
- 挑戦的萌芽研究 平成27) 『説文解字』における字体の定例 山元宣宏(宮崎大学)170千円
- 特別研究員奨励費(平成27) 6〜8世紀の日本書道史における書風基準の構築―中韓の文字史料との比較を通して― 加藤詩乃(青山学院大学)80千円

日々、試行錯誤

星子 桃子

博物館に就職して三年目。いよいよ自身自身の展示企画を考えることに。早速、最近興味を持つていることの調査を進め、「寄り合い書き」や「合作」といった、一つの作品を複数人で作り上げているものをテーマにできないか、試行錯誤の真つ最中である。

作品そのものの書法美のみならず、制作されたシチュエーションや携わっているメンバーの交流といった、制作背景を探る面白さを伝えたいと考えているが……。当館は歴史博物館であるため、書表現の美しさや面白さだけでなく、歴史上の評価も知ってもらわなければならない。あれこれ思索してみるのが、今度は予算の問題が！理想と現実の狭間で悩ましい日々が続いている。

西湖の夕暮れ

正岡 知晃

浙江省杭州市、西湖に浮かぶ孤山に初めて訪れたのは二〇〇九年夏のことでした。夏の杭州は茹だるような暑さで、浙江大学玉泉校区での留学生活を始めたばかりの私は、孤山へ大汗をかきながら自転車に向かいました。朝倉文夫が呉昌碩へ贈った胸像、中国印学博物館等を見学し、隣

接されている杭州老館の楼外楼を巡りました。もうへとへとでしたが、ふと眺めた夕暮れの西湖は疲れが吹き飛ぶほど綺麗でした。西泠印社に所属した文人達も同じ景色を眺めたのかと感慨深いものがあつたことを覚えています。

篆刻界に燦然と輝く数々の功績を残した、西泠印社の設立当時の活動を今でも追っている理由の一つには、この留学当時の感慨があるのだろうと今回改めて感じました。自身の根本を忘れず今後の活動を続けていきたいと思っています。

古璽印偽造問題について

栗 躍崇

古璽印における研究は、篆刻学・文字学・考古学に関係が深く、得られた情報は地名・姓氏・官制・用印制度の研究に役立ちます。

しかし、現代技術の進歩とともに、古璽印偽造の手段も多様化しており、偽造問題も多く発生しています。戦国時代の燕国璽印を例として、筆者は三十二件(含官璽・私璽・陶文印)の偽物の資料を収集しました。その中の璽印のいくつかは器形・印面布字・文字構造までも、本物そっくりです。収蔵熱が旺盛な現在、古璽印に関する研究成果が公開されると、利にかられた

骨董商らは、たちどころにその研究成果を捏造に反映して、一段と迫真の古璽印を生産し、真偽の弁別はいよいよ厳しくなるのです。このような悪循環について、研究者は如何に対応すべきか。筆者が今考えている問題です。

富士について

渡邊 亮太

古くより霊峰とされ、多くの作品の題材として扱われてきた富士ではあるが、二〇一三年に世界遺産に登録されてからは、富士への人々の思いはいつそう多様化し、また新たな変化もあつただろう。

静岡県富士市で生まれた私にとって、富士は日常の身近な存在で、特別な対象ではなかった。ところが、住まいを東京に移し、富士を目にするのが年に数度に激減した今、その存在は却って大きくなっている。

その思いに駆られるように、太宰治の「富嶽百景」を読み返した。周知のとおり、一九三九年に太宰が山梨県川口村、御坂峠にある天下茶屋に三ヶ月間逗留した時の作であるが、その天下茶屋は今もあり、月見草も変わらず富士の山裾を飾っている。太宰が様々な富士を描写したように、時には富士から多くの息吹を汲み取りながら書に臨みたい。

編集後記

◆滋賀大学教育学部農場近くフジンスで囲まれた墓地の一隅の三基の墓碑が寒山寺由縁と、教示頂いた。寒山寺は大坂曽根崎に移転(現在は箕面)、山田菊香は熊野から大坂に出て「寒山寺裏寒山子」と題する詩を作り寒山と改号した。(柿木原)

◆昨年の暮れにかけて、「日本書道文化の伝統と継承―かな美への挑戦―」という展覧会が帝京大学総合博物館企画展示室で開催された。古筆類に関しては、個人蔵のものばかりなので、もしかしたら一期一会となつたものもあるう。ともあれ、大学内に立派な展示スペースを有し、羨望の限り。(高城)

◆先日、書齋を整理していたら学生時代のレポートや研究ノートが出てきた。間違いや調べが足りない箇所ばかりだが、懐かしさの余り、つい見入ってしまった。未熟ながらも必死に学んだあの頃、今の自分には眩しく感じられてならない。(藤森)

◆毎年中国を訪ねていますが日本人客が減少しているように思います。北京の琉璃廠(リユーリーチャン)でさえ日本人の姿がありません。出版や研究、展覧会、シンポジウムなど経済力をつけた中国の姿をしっかり見ておくことも大切ではないかと思っています。(小川)